226
2023.7.1

学会ニュース

The Academic Society of Tokyo Woman's Christian University

卒業論文紹介

▶ 人形の美学　松下早希　1頁
▶ 中世における異類婚姻譚の研究
── 木幡狐を中心に ──　奥苑明日佳　2頁
▶ Representations of History in Popular Culture
クエバス マルティン マリア　3頁
▶ 江戸の社会と性文化
── 四ツ目屋忠兵衛店から考える江戸の「性イメージ」──
鈴木愛実　4頁
▶ 男性相続をめぐる変遷　金荷璟　5頁
▶ 擬態する女性たち
── 不可視化された腐女子の花園 ──
野村くるみ　6頁
▶ 日本企業におけるCSV活動に関する考察
佐俣夏紀　7頁
▶ 消費を通じた社会的課題解決の可能性について
── 生活者の意識・行動調査を通じて ──
磯田菜月　7頁
▶ 女子大学生のきょうだい関係の変化及び認知が自己に与える影響
大﨑和々子　熊木里優　西山杏　松本みな　9頁
▶ 学生が想像する授業と教員が考える授業の違い
── シラバスで形成される授業イメージのギャップの要因 ──
岸璃奈　小池美緒　舟越悠乃　10頁
▶ 粘菌アルゴリズムを用いた混雑地域における避難経路の導出手法
塩出吾衣子　11頁

人形の美学

現代教養学部人文学科哲学専攻　**松下早希**

ひとくちに人形といっても、世の中には実に多くの種類の人形が存在している。現代では多くの種類の人形が、愛玩用や鑑賞用、幼児向けの玩具として制作、販売されている。SNS上でも、人形に関する投稿を多く見かけるようになった。その投稿は、人形と生活を共にする様子を撮影するほか、人形を自ら製作し、販売するなど、様々である。実際に私も人形愛好家の一人であり、幼少期には人形と寝食を共にしていた上、成人を迎えた現在でも自宅には25体以上のぬいぐるみ人形がある。人形とともに生活を送ることで、漠然とした安心感、および癒しを得ることができるというのが、私が人形を所有する理由の大部分を占める。

近年はSNSの普及も相まって、老若男女問わず人形を愛する人々を見かけるようになったが、命なき「物」であるはずの人形になぜ我々は愛おしさを感じるのだろうかと疑問を抱いた。

そこで卒論では、人形とはいったい何なのか、そして人形は人間にとってどのような存在であるかを哲学的に明らかにすることを試みた。これらを明らかにすることにより、なぜ命なき「物」であるはずの人形が愛おしく感じるのか、また老若男女を惹きつける人形の魅力について、手掛かりを得られると考えたからである。

議論の流れとしては、美学者増淵宗一の論考（『人形と情念』(1986)）等のこれ迄の人形研究を軸にして、まず人形のかつての歴史や役割について解説し、次に、人形が人々に愛でられる契機となった人形の「衣裳的形成」に着目し、「衣裳的形成」と正反対の性質をもつ彫刻（「裸身・量塊的形成」）と人形を比較検討した。十八世紀の哲学者ヘルダーの（触覚の美学に基づく「裸身・量塊的形成」としての）古典的彫刻論を批判的参照項とする増淵の人形論（つまり「彫刻」の「触覚性」とは違う、「人形」の「触覚性」が「衣装的形成」に結びつく）とは違う視点も組み入れながら、人形の魅力の独自性を明らかにするよう試みた。特に、その独自性にとって、「動く人形」ともいえる「自動人形（ロボット）」と人形の比較を更に検証した。増淵が言及する和辻の浄瑠璃人形論（『歌舞伎と操り浄瑠璃』）が示唆しているように、人間には人形を動かしたいという願望があること、また人形のような性質をもつ最近話題になっているロボットの「パロ」と「LOVOT」について考察し、人形の持つ魅力の正体を明らかにすることを試みた。最後に、人間と人形の関係性に注目し、坂口安吾が取り上げた人形愛

好者の高木貴与子や、映画『空気人形』を例に挙げながら、人間が人形を愛するということについて考察した。

以上の検証から得たのは次のようなことだ。まず、人形を人形らしめる一つの要素は、衣裳的形成を基盤にしつつ、そこに生死がない点での圧倒的受動性が重なることである。人形は衣裳的形成を契機に、呪術的道具から、人間の愛惜の対象へと推移した。美しい衣裳的形成がなされる以前の人形は、例えば丑の刻参りで用いられる「藁人形」や、新生児の厄除けとして用いられた「天児」「這子」のように、呪術の道具として用いられることが多かった。また、人間が人形に行う世話は愛玩動物への世話と共通する部分があるが、人形には生死がないため、人形に行う世話は愛玩動物への世話のデフォルメでもあろう。更に重要なこととして、いつの時代でも、人間と人形の関係性の中には「自己愛」が切っても切れないものとして潜んでいることも忘れてはならない。人形愛の中に含意される自己愛というこの論点は、人形を超えて、好きなキャラクターやアイドル等、実際には神ではないが、いわば誰かにとっての「信仰対象」を模した人形やマスコットについても及んでいく可能性もある。この可能性については、卒論では示唆するだけで終わったが、今後自分なりに改めて考えてみたいと思っている。とは言え、人形愛が自己愛を孕むからと言って、それは単なる自己中心的な独り善がりな愛に終わるだけとも思えない。上記の述べた様に、卒論の最後では近年の愛玩用ロボットへの人々の関心を人形愛との関連で考察した、増淵は、ロボットは人形とちがって人間の理想の友たり得ないと考え、ロボットと人形に乗り越えられない分割線を引く。しかし、従来の働くロボットのような実用性が必ずしも明言されない、かつ人形のような性質を持つロボット（例に挙げたLOVOTやパロ等）の出現は、人形愛のうちにある単純な「自己愛」に決して解消できない側面を炙り出してくれる点で重要だ。むしろ、人形には、「明確に限定された実用性を敢えて放棄されることで、我々に想像の余地を与える」豊かな可能性があるのだ。

今回卒論を哲学専攻の学生として書くにあたって「人形」をテーマにした原初の理由としては、最初に述べた様に、単純に私自身がぬいぐるみ人形の愛好家であるからだ。卒論を執筆する前までは、人間が人形を愛する理由を特に考えたことがなく、強いて言えば人形の可愛さに起因するのだろうという漠然とした考えのみ持っていた。しかし、執筆に必要な資料（人形に関する資料）を集めていくうちに、人間が人形を愛するのは、人形の有する呪術性や、人間の自己愛など、「可愛さ」の一言では到底片づけられない要因が絡まりあっていることに驚愕した。日常の様々な事象も必ず、単純な答えでは片づけられない要因が絡まりあって起こるものであると考える。今回の卒論では人間が人形を愛する所以は主に自己愛に起因するとしたが、恐らくその背後にも様々な要因が広がっているのだろう。

中世における異類婚姻譚の研究　――木幡狐を中心に――

現代教養学部人文学科日本文学専攻　**奥　苑　明日佳**

『木幡狐』は室町時代中期から後期に成立したとされる作者未詳の中世小説である。雌狐が人間の男と婚姻関係を結ぶ、いわゆる異類婚姻譚の一種だが、その中でも「恋愛要素」「仏教色の濃さ」に特徴があると先行研究では言われてきた。だが、それらの指摘は狐女房譚の文学史や『木幡狐』諸本本文の調査などといった基本的な検討を十分に経た上でなされてきたものではない。本稿はこれらの問題点を検証し、『木幡狐』の「恋愛要素」「仏教色の濃さ」という特徴について再考したものである。

はじめに上代から中世までの狐作品・各時代の狐女房譚の調査を行い、先行研究にて指摘される特徴が『木幡狐』のみに見られるものであるかを確認した。結果として「恋愛要素」「仏教色の濃さ」という二点の特徴は、他の狐作品・狐女房譚には特に見受けられず、他狐作品・狐女房譚と比較して『木幡狐』の特徴であると、とりあえずは言えると結論付けた。だがこれは、多種の諸本のうちの後出本を対象にしたときに確認されるものにすぎない。そもそも先行研究では、諸本のうちのどれが古態を留めているのかという検討も不十分であったが、本文の綿密な検討により「ローマ本」と呼ばれる一本を古態と認めるべきことを本稿は明らかにした。このローマ本を対象にすると、「恋愛要素」「仏教色の濃さ」について以下のように整理し直すことができる。

「恋愛要素」

異類であるきしゅ御前がとても人間らしい様子で描かれることや、他の狐女房譚には見られない詳細な出会い・契り・日常の描写や登場人物の心情描写がされており、他の狐女房譚と比較するとただの異類婚姻譚ではなく恋愛物語としての側面が強く見られた。他の狐女房譚では見られる、異類としての決定的な別れ・狐による特別な力の付与、といった場面が描かれないことも、『木幡狐』が前例の狐女房譚のように「狐」としての側面を強く押し出したものではなく「恋愛要素」を意識して書いた作品であるからと考える。また愛する人との別れを受け、出家に至るという恋愛物語は中世小説に複数見られる話型であることも確認できた。

「仏教色の濃さ」

ローマ本の仏教要素を確認すると、先行研究で根拠とされていた箇所が存在しない諸本であることなどが分かり、描かれている仏教要素は当時の中世小説によく描か

れる程度のものだった。中世小説では、「仏教」は物語によく取り込まれた要素であり、当時の他の異類婚姻譚を確認してみても同程度の仏教要素が確認できた。

調査の結果、ローマ本『木幡狐』の作者は狐女房譚の話型を使用しながら意識的に「恋愛要素」を取り入れた中世小説的恋愛物語を描き、それに伴い「仏教要素」も話の中に散りばめられたと考えられる。『木幡狐』の特徴として指摘されていた「恋愛要素」や「仏教色の濃さ」は、中世小説という分類で見るとごく普通の要素であった。しかし、このような中世小説的要素を既存の狐女房譚の話型に上手く取り込み、新しい形の狐女房譚となったことが『木幡狐』独自の面白みといえるだろう。

さらに、ローマ本を起点に置くことによって、以後の諸本展開についての見通しも得ることができる。後出の諸本においては、「仏教要素」が特に結末部において拡大・強調されてゆくのであり、それはこの物語の読まれ方を示唆している。ローマ本以降の諸本では当時の流行もあり、結末部に教訓が意図的に付け加えられた。先行研究にて指摘されていた「仏教色の濃さ」の根拠となる教訓は、後から付け足された要素だったのである。このような補強を経て、ローマ本以降の読者は恋愛要素の強い物語ではなく仏教色の濃い物語として受け取った可能性が高い。また異類視点の恋愛物語という特異性からも仏教要素との親和性が高く、最初に与えられた「女が異類だという面白みのある恋愛物語」という形だけでなく仏教喧伝の物語としても存在するようになっていったのではないか。

Representations of History in Popular Culture

現代教養学部国際英語学科国際英語専攻　**クエバス マルティン マリア**

人類が過去と同じ過ちを繰り返さないためには、歴史を深く研究することが重要である。しかし、学校教育では歴史は暗記させて学ばせる傾向があり、学生が歴史という科目そのものを退屈と感じ敬遠する要因となっている。しかし、歴史はすでに決定した過去の出来事だと思われがちだが、実際には毎日書き直されている。ソーシャル・メディアでは人々が史実にアクセスし解釈した結果、新しい「歴史」を発信しており、小説、映画、漫画、アニメーション、ゲームも歴史を題材にしたものが多い。その意味では、こういったポピュラーカルチャーを利用することで、これから新たな歴史を創る若者が過去の歴史に興味を持つ可能性があると考え、ポピュラーカルチャーにおける歴史表象を卒業論文のテーマに選んだ。

ポピュラーカルチャーには歴史を扱ったものが意外と多い。はっきりと歴史を題材にしているとわかるものもあれば、様々なレイヤーの下に歴史が隠されているものもある。そのため、第一章“Types of Influences in Popular Culture”では、歴史的要素がある作品を3種類に分けて分析した。一番目は、歴史上の人物も登場人物としてそのまま使用され、物語もほぼ史実通りという作品である。『ヘタリア』という漫画・アニメが例として挙げられる。二番目は、歴史的な場面や歴史上の人物は背景としては登場するが、中心となる物語と主人公はフィクションという作品である。『アサシンズ・クリード』というゲームシリーズが例として挙げられる。三番目は、歴史的な要素が入っているものの、元々歴史に興味がなければそうとは気づかない作品であり、海外ドラマ『ゲーム・オブ・スローンズ』がその良い例である。この3つの作品の受容を考察した結果、人々がこれらの作品に触れることで歴史に興味を持つようになるか否かは、その作品に歴史が可視化されている度合いだけでなく、視聴者の歴史への興味の度合いも無視できない要因であるということが明らかになった。

しかし、作品の歴史的な要素に気づかなくても、人々は作品から知らず知らずのうちに政治的な影響を受ける。その影響には政治的に問題がある世界観も含まれる。第二章“Critical Thinking”では、『進撃の巨人』を例にそのような影響を分析した。作品は、途中から第2世界大戦やホロコーストを想起させるようになり、元々英雄的だった主人公も悪役になり集団虐殺を起こす。実際に作者は第二次世界大戦の時代から着想を得たと述べており、作品はナチスや反ユダヤ主義を擁護するとして批判を浴びた。しかし一方で、主人公や作品の変化にもかかわらず、そのキャラクターを応援し続けた視聴者もいたのである。作者がホロコーストに対してどのような意識を持っていたかは明確ではないが、視聴者の作品鑑賞に批評的思考が伴わなければ、作品に内在する問題がある世界観をそのまま受け入れてしまう危険がある。

歴史を扱ったポピュラーカルチャーを鑑賞する際には、歴史への好奇心や作品への批評的思考を伴わなければ、歴史を学ばないところか、差別的な世界観を内面化する危険がある。一方で、若者が興味を持って歴史を学ぶのにポピュラーカルチャーが果たす役割は非常に大きい。例えば『アサシンズ・クリード』には『ディスカバリー・ツアー』というゲームモードがあり、ヴァイキングの時代や古代ギリシャやエジプトについての歴史（内容は専門家の検証済み）を双方向的に学ぶことが可能である。こういったコンテンツであれば、若者が、楽しみつつ、批評的思考を伴って歴史から多くを学ぶことができ、過去にあった悲しい出来事を今後起こさないことに繋がっていくと思われる。

江戸の社会と性文化

── 四ツ目屋忠兵衛店から考える江戸の「性イメージ」──

現代教養学部人文学科歴史文化専攻　鈴　木　愛　実

【はじめに／研究背景】

筆者は本学在学中に、性教育の発信活動を行うNPO団体並びにセルフプレジャーアイテムの販売員として活動した経験を持つ。そして次第に近世期における性／アダルトグッズ等についても関心を抱くようになった。その中で現代日本人が漠然と「江戸の性はおおらかで寛容であった」と想像している現状にも疑問を持ち始めた。したがって、本稿では性具性薬の販売店（以下女小間物細工所）として有名であった「四ツ目屋」を切り口とし、多角的な視点で「四ツ目屋」を見つめ直す中で、江戸の社会における性文化＝「性イメージ」の一端を覗き見る試みに挑戦した。

【四ツ目屋とは】

両国薬研堀に存在した江戸を代表する性具性薬の専門店。当時有名であった秘具秘薬のほとんど全ての商品を商っていたとされる。有名な性薬として「長命丸（ちょうめいがん）」「危檣丸（ほばしらがん）」がある。（渡辺信一郎『秘具秘薬事典』参考）また少なく見積もっても百五十年もの間、江戸社会に存在し続けていた秘具秘薬の老舗だったようである。（筆者調べ）

【研究目的】

１．問いと課題

―〈問い〉現代日本人が抱く『江戸の性はおおらか論』は果たして正しいか。

〈課題〉第一に「四ツ目屋」の実態、社会的立ち位置を明らかにし、第二に「四ツ目屋」を通じて従来的な江戸の「性イメージ」から新たな江戸の「性イメージ」を見通すこと。

２．問い解明のためのアプローチ方法について

―〈従来〉「四ツ目屋」は女小間物細工所としてのみ認識され、江戸時代を生きる人々の性に対する興味関心、好奇心の象徴として引き合いに出されることが多々あった。

〈本稿〉「四ツ目屋」を女小間物細工所としての一側面から見るのではなく、多角的な視点で捉えることに重点を置いた。具体的には、①四ツ目屋が存在した「両国薬研堀」という土地の性質②従来的な女小間物細工所「四ツ目屋」の見直し、そして新史料に基づいて③「四ツ目屋」のもう一つの経営側面④「四ツ目屋」の経営者「四ツ目屋忠兵衛」にまで焦点を当て、「四ツ目屋」の再考察を行った。

３．研究史料

―本稿では、『江戸買物独案内（上／下／飲食之巻）』（文政７年出版）を主要史料集としながら、「四ツ目屋」の実態や社会的立ち位置を明らかにすべく、新旧合わせて４つの史料を用いた。上記の再考察項目（①～④）と関連付けながら以下に記す。

①『江戸買物独案内（上／下／飲食之巻）』全三巻参照

②旧『江戸買物独案内』下巻収録「女小間物細工所両国薬研堀四ツ目屋忠兵衛店」

③新『江戸買物独案内』下巻収録「艾問屋両国薬研堀四ツ目屋忠兵衛店」

④新『藤岡屋日記』収録「町芸者被召捕一件」／新『浅草寺日記』収録「蠟燭講頭取継上下願」

【研究内容／研究結果】

１．現代日本人の江戸に対する性イメージ

「四ツ目屋」を通じて江戸の性イメージを考える前段階として、第一章では、まず小谷野敦『江戸幻想批判「江戸の性愛」礼讃論を撃つ』を元に学者が考える江戸の性イメージについて確認した。その上でインターネットやSNS（Twitter）を元に現代日本人が江戸の性に対してどのように考えているか、どのような情報に触れているのかということに関して調査を行った。結果として、①学者側は近代批判を遂行するうちにあたかも江戸時代が性に対しておおらかで寛容な時代であった、という誤った見方をしてきた節があり、②そのような学者らの影響を受け、「江戸の性はおおらか論」が一般人の中でも勢力的になっていることを明らかにした。

２．両国薬研堀の土地の性質

第二章では、前述した４つの視点から江戸「四ツ目屋」を再考察した。まず、「四ツ目屋」が存在していた両国薬研堀という土地の性質について、『江戸名所図会』『江戸切絵図（尾張版）』を用いて空間のイメージを大まかに掴んだ。その上で『江戸買物独案内』全三巻の中から両国薬研堀に存在する商店を全てリストアップし、それらを吟味することで当時の両国薬研堀という土地の性質について検討した。結果として、当該地はおそらく雑多で多様な店々が連なり、老若男女問わず多くの人々で賑わう場所であったことが想像された。

３．「封付」が持つ意味

本稿では、従来的な「四ツ目屋」の見直し又江戸の性イメージの一考察として、旧史料「女小間物細工所両国薬研堀四ツ目屋忠兵衛店」の文中に記された性具の梱包形態＝「封付」が持つ意味について丁寧に考察を行った。封を付けて性具を梱包するのはなぜなのか―。筆者は、性具が有している①薄く壊れやすい性質②高級品である性質、と同様の性質を持つ商品の梱包形態を調査することで「封付」が持つ意味について調査を行った。結果として同様の梱包形態が一切見られないことから性具に対する「恥ずかしさ」の現れが「封付」である可能性が最も高いと結論付けた。

４．艾問屋としての「四ツ目屋」

筆者は、『江戸買物独案内』を通じて「四ツ目屋」が

女小間物細工所だけではなく艾問屋も兼業していたことを明示する新史料を発見した。本稿では、その新史料を元に「四ツ目屋」における女小間物細工所と艾問屋の先天性と後天性、兼業の動機についていくつかの仮説を立て検証を行った。検証の結果、時代背景や動機等の観点で矛盾点が最も少ないことから「四ツ目屋」は艾問屋から商いを始め、その後女小間物細工所を兼業し始めた可能性が最も高いと推察した。つまり、「四ツ目屋」は開業した当初から女小間物細工所として社会に存在していたのではなく、艾問屋から次第に商いの姿を変え、それに伴い周囲の目線も変化していった可能性が高いと考えられる。加えて、「四ツ目屋」が艾問屋として、両国薬研堀の地である程度の信用信頼を持っていたために「四ツ目屋」の女小間物細工所としての商いは庶民に受け容れられ、性具性薬の専門店として有名になりえたのかもしれない。

5．四ツ目屋忠兵衛の社会的立ち位置

本稿では、従来の四ツ目屋研究で注目されることが非常に少なかった経営者「四ツ目屋忠兵衛」についても2点の新史料を元に考察を行った。考察の結果、経営者「四ツ目屋忠兵衛」は①家主を務めており、②浅草寺において蝋燭講中頭取という上位役職を務めていたことの二点を明らかにした。性具性薬を商う商人というとどこか風変わりな人物を想起するが、四ツ目屋の経営者の実像は❶比較的豊富な財力を持ち、❷その地域において発言権を有し、❸江戸の社会と深い結びつきのある商人であることが新たに理解できた。

【結論】

本稿では、「四ツ目屋」という窓から江戸の「性イメージ」を見通してみようという試みのもと、研究に努めてきた。本研究によって、「四ツ目屋」が長く江戸社会に根付いた商店であり、「四ツ目屋」の経営者は町内における発言権を有し、浅草寺内での役職にも従事する有力商人であったと推測できたことで江戸社会研究における「四ツ目屋」の存在価値は更に高まったといえる。現在、「江戸の性はおおらかで寛容であった」という「性イメージ」を持つ人々が多数を占める現状がある。しかし筆者は、本研究内容／結果を通じて、江戸の人々が「性に対しておおらかであった」というよりも、性に対する好奇心旺盛さと探求心、又「気恥ずかしさ」の両面を持ちながら、表舞台ではない「秘められた」世界の中で性を楽しんできたのではないかとの結論に至った。

男性相続をめぐる変遷

現代教養学部国際社会学科国際関係専攻　金　荷　璟

本論文は、現代韓国の嫡長子優待相続の慣習が、高麗時代から現代に至るまで、どのように変化し続けてきたかを明らかにした論文である。嫡長子優待相続とは、家系ないし祭祀を正妻の長子孫が優先して相続することである。本論文は、韓国の嫡長子優待相続の開始時期とそれがなぜ維持されたかについて明らかにすることで、慣習が形成された背景と理由を議論し、今日の韓国社会において男女差別や兄弟差別ともしばしば判断されるこの慣習を解消するために役立つ意義を持つと考える。

高麗時代から朝鮮中期までの相続について家系相続と財産相続に分けて調べると、朝鮮初期までは財産は男女や長男次男の差別なく均分に相続をされていた。家系相続については長男が継承者になるが、祭祀においては兄弟姉妹が順番に行った。その相続形態に変化が生じるようになるのは朝鮮中期である。婚姻風習が中国から入った、中国南宋時代の性理学者である朱子（1130~1200）が著した家庭で遵守すべき礼法と儀礼をまとめた本である朱子家礼に影響され、女性が男性の家に行く「親迎」を受け入れようとする動きが起き、女性の立場が低くなった。また、朱子家礼によって宗法思想が広がり、嫡長子による家系継承の意味が重要になると同時に嫡長子以外の子供たちの立場が低くなった。

そうして生じた嫡長子相続が、朝鮮後期から植民地時代までにどのように変化したかを検討すると、朝鮮後期は初期とは異なる点として、立後つまり養子縁組が行われる数が増えたことと、財産の分与を記録した分財記から長男中心の財産分配が行われる変化が新たに生じたことが分かった。植民地時代に入ると、当初、日本政府は相続に関して朝鮮の慣習を採用していたが、法律の改正により日本式の戸主中心の家制度の導入と戸籍制度の変化が生じ、現代につながる慣習の認識が広まることになった。

日本の終戦後、すなわち1945年に朝鮮の植民地支配が終わり、大韓民国が建国された以後の相続について調べると、1945年以後に制定された民法は男女差別的な要素を依然として内包し、戸主すなわち嫡長子を優遇する法律が残っていた。そのため、こうした男女差別にもつながる法律を変えようとするため、民法改正、戸主制廃止がなされた。しかし2008年に韓国で起きた二つの裁判を通じて、依然として嫡長子優待相続が慣習として残っていることが認められ、2022年の今も嫡長子優待相続の慣習は家庭内の葛藤の要素になっているといえる。

相続の変遷について歴史研究は数多く行われているが、現代の「慣習」と結び付けて、その始まりと維持される理由を明確にした研究は少ないことから、本論文が

明らかにした成果は意義を持つだろう。しかし、研究の制約のため、慣習がいつはじまったのかについて、時期を特定することができなかった。さらに、残っている史料は両班と言われる高位層の婚姻関係に関するもので、平民層の婚姻関係については接近することが難しい。そのため、本論文で言及した相続変化が、朝鮮民族全てにあてはまるのかは分からない。また、嫡長子が優待される財産分与についても、16～17世紀の記録に比べると18世紀の記録が少なく、18世紀にも嫡長子優待財産分与が残っていたのかは分からない。

以上のように、本論文が解決できなかった課題は多い。嫡長子優待相続についての問題は、単に歴史的史実の解明にとどまらず、現代韓国社会が抱える女性差別問題に取り組むうえでも重要なテーマである。本論文の成果は、そうしたテーマに一定の貢献ができたと考える。

擬態する女性たち ――不可視化された腐女子の花園――

現代教養学部国際社会学科社会学専攻 **野 村 くるみ**

近年、日本のアニメや漫画、ゲームといったコンテンツ産業の発展は目まぐるしいものである。しかしながら、大衆化されつつあるコンテンツ作品を好んでいるという事実を隠したいと考える層は一定数存在している。社会のなかで愛好者が多数いるにもかかわらず、そうした趣味嗜好を世間に明かさない人々はどのような意図で趣味嗜好を隠すのだろうか。

本稿では、自身の趣味を周囲や世間に隠すことに重きを置いている、「腐女子」と呼ばれる女性たちにインタビュー調査を実施することで、好意を隠す経緯や自分自身を欺くことへの葛藤、隠すことで得ることができる喜び、といった擬態行為の全貌を調査し、「隠す」という行為のさらなる意義を見出していく。

本稿の研究対象である腐女子とは、「BL作品やBL妄想を好む人物」のことを指し示す。BLはボーイズラブの略称であり、男性同士の同性愛を意味する。かつては「普通」の枠組みから外れた異端的な存在として認知されていた腐女子であるが、近年は、名称の広がりや腐女子を題材としたメディア作品、BL作品の社会的普及によって、カミングアウトしやすい環境が整いつつある。だが、腐女子は依然として自身の正体を隠したがる傾向にあり、公的な空間では腐女子らしい行動を控え、周囲にいる非腐女子の行動を模倣し、「まっとうな女の子」を演じて生活している。

彼女たちが腐女子を隠す理由には、メディアや非腐女子が抱える腐女子へのステレオタイプ化された偏見や、内外部からのバッシング、性愛やセクシュアリティを公にするべきではないという意識からなるネガティブな要因が目立つ。だが、彼女たちは社会からの侮蔑の眼差しや自身の趣味嗜好への後ろめたさを覆い隠すためだけに非腐女子に擬態しているわけではない。

そこで、「隠す」という行為の根底に眠る新たな意義を追求するために、実際に腐女子であることを隠して生活している女子大生6名にインタビュー調査を実施した。なぜ腐女子であることを隠すのか、腐女子という属性をどのように考えているのか、などの問いを軸に20項目の質問を用意し、それぞれの回答を聞き取った。

調査結果から見えてきたものは主に3つである。まず、彼女たちは社会や非腐女子に迷惑をかけないという信条の元、外部からの圧力で腐女子趣味を隠すのではなく、非腐女子と共生するために自らの意志で腐女子を隠しているということ。次に、彼女たちが生息している腐女子社会では自身の性的嗜好やジェンダー嗜好について自由に発言することが許されており、彼女たちにとってそこは学校や家庭、職場とは異なる価値をもつ、息のしやすい居場所に成り得るということ。そして、彼女たちは世間から隠遁することで深まる腐女子間の絆を大切に育んでいるという事実である。

調査を経て、彼女らが腐女子隠しを実践する意義のなかには、隠されることで発生する腐女子社会という秘密の花園での交流が見えてきた。彼女たちは、秘密の共有から育まれる強固な「絆」、秘密を抱えることへの「スリル」、相手を見極めるゲーム感覚の「探り合い」といった、密やかなる腐女子社会特有の文化に娯楽性を見出している。

そのため、どれだけ腐女子を受け入れる社会が築かれても、彼女たちは密やかな活動を続けていくと考えられる。腐女子が社会に受け入れられるということは、彼女たちが長い年月をかけて作り上げてきた腐女子だけの楽園が公の元に晒されることとなる。それは腐女子間で共有していた秘密が外部に露見することに繋がり、腐女子たちが築いていた「秘密の共有関係」という特別性が消失してしまう。この共有関係こそが彼女たちが最も守りたいものの1つであるということを忘れてはならない。

彼女たちはこれからも、かねてから存在する腐女子社会の慣習に倣い、腐女子特有の様々な葛藤を抱えながらも、自分たちの意志で非腐女子への擬態を続けていくことだろう。

日本企業におけるCSV活動に関する考察

現代教養学部国際社会学科経済学専攻　佐　俣　夏　紀

近年、地球環境の悪化、貧困と格差など、多くの社会課題が問題視されており、企業にも社会課題の解決への関わりが求められつつある。そこでは、従来の「企業の社会的責任（CSR）」としてではなく、経済的価値を創り出す「共通価値の創造（CSV）」として捉えるといったより能動的な変化も見られる。このCSVを提唱したPorter and Kramer（2011）は、その具体的なアプローチとして、製品と市場の見直し、バリューチェーンの生産性の再定義、企業が拠点を置く地域を支援する産業クラスターがあるとしている。本研究では、特にこの製品と市場の見直し、バリューチェーンの生産性の再定義に着目して、具体的な企業のCSV活動の事例を分析した。

Porter and Kramer（2011）を契機に企業のCSVを対象とする理論的研究も蓄積されてきてはいるものの、中小企業によるCSV活動は、大企業のそれと比べて未だ十分に検討されていない。しかしながら、筆者は、中小企業こそCSVに活路を見いだせるのではないかと考える。中小企業は経営資源こそ乏しいが、その一方で、大企業に比べて地域性や意思決定の迅速性に優れているからである。そこで、本研究では、CSV活動を通して高い成果をあげている石坂産業株式会社（以下、石坂産業）を対象に事例研究を行った。具体的には、石坂産業への実地調査で得られた1次データを基に、文献等の2次データで補完した。石坂産業は、埼玉県入間郡に立地し、従業員数約180名で構成され、主力の産業廃棄物中間処理業と環境教育事業を通して地域での社会貢献活動を行う中小企業である。

研究の結果、石坂産業は製品と市場の見直しとバリューチェーンの生産性の再定義を積極的に実施し、高いパフォーマンスを実現していることが明らかとなった。石坂産業は、誤報であったダイオキシン騒動を機に「製品と市場」を見直し、主力事業だった建設系産業廃棄物の焼却による縮減事業から再資源化事業へと業態転換を図った。石坂産業では、この「製品と市場の見直し」を受けて、「バリューチェーンの生産性の再定義」を行っている。プラント内の設備にこだわることでエネルギーの利用の効率化を図り、環境問題の解決とともにコスト削減にも成功している。設備を新たに導入することは多額のイニシャルコストを要するが、ランニングコストの削減に成功し、長期的に見ればコスト削減につながっている。石坂産業はアイエスエンジニアリング株式会社との協働で、環境問題を考慮した製品を開発し、リサイクル製品の販売業を新規事業として成立させている。石坂産業はCSV活動を戦略として捉えており、あくまでも重要なのは企業成長であると考えている。実際、石坂産業の直近5年間の売上高は順調に推移している。

また、企業の規模に関わらずCSV活動を行えるのかを検討するため、本研究では、大企業である株式会社伊藤園（以下、伊藤園）の事例分析も行った。伊藤園のCSV活動においても、生産性を向上させる上で同様のメカニズムが働いていた。以上の石坂産業と伊藤園の2つの事例分析を通じ、企業の規模に関わらず、CSV活動の実践により高いパフォーマンスを実現できることが明らかとなった。

なお、中小企業がCSV活動を行う場合、単独ではなく、ネットワークを形成し取り組む方が有効であるという（福沢、2017）。石坂産業においても、工場の一般公開や環境教育の場の提供により、企業や組織の壁を越えて協働を行っている。近年では、大企業に限らず、中小企業もまた、産業クラスターやオープンイノベーションの場で、イノベーションの創出に向けて重要な役割を担っている。そして、地域課題の解決が事業に直結しやすいという点では、地域に密着しつつ、行政を含めた様々な主体との連携を促進することで、さらなる成長が期待される。

消費を通じた社会的課題解決の可能性について

――生活者の意識・行動調査を通じて――

国際社会学科コミュニティ構想専攻　磯　田　菜　月

【研究の背景と目的】

近年、世界中で社会的課題に対する関心が高まっている。社会のために役立ちたいと考える生活者は多く、課題解決に向けた取り組みも広がりを見せている。そのような中で着目されているのが、社会的課題の解決に繋がる商品を購入する「エシカル消費」だ。しかし、このような商品を手に取るのは、社会的課題に関心のある人が多くを占めており、社会全体で定着しているとは言えない状況である。

本研究の目的は、社会的課題の解決に繋がる商品（以下、ソーシャルプロダクツ）台頭の背景や生活者の特性を分析し、文献調査とアンケート調査を通じて、生活者がこれらの商品に対する消費行動・意欲を高めるための示唆を与えることである。

【研究の方法】

1）文献調査

先行研究から、生活者の消費行動や思考に基づいて特徴付けられる、生活者の階層性について明らかにした。ソーシャルプロダクツの購入層は、女性で年齢が高く（平均 49.5 歳）、既婚者で子どもを持つ人が多い。その一方、無関心層も存在し、彼らは若い世代で男性、未婚で子どもがいない傾向があると指摘されている。

2）アンケート調査

本調査は、一般社団法人ソーシャルプロダクツ普及推進協会による「生活者の社会的意識・行動に関する調査」に協力を仰ぐ形で、筆者が調査したい設問項目を挿入していただき、2022 年に実施した。調査の目的は、生活者の消費を通じて社会的課題の解決を図ることへの意識、及びその特徴を明らかにすることである。

調査方法はインターネットで、日本全国 47 都道府県に対して行われ、15 歳から 69 歳の男女 600 名を対象としている。性別と年齢には割り付けを行い、15 ～ 19 歳、20 ～ 60 代のサンプル数をそれぞれ 50 名（男女 25 名ずつ）とした。調査実施後に、筆者はローデータの共有を受け、そのデータを使って分析を行った。

【結果】

アンケート調査から、SDGs を始めとする社会的課題解決に向けた取り組みの拡大に伴い、生活者の社会的関心が高まっていることが明らかになった。何らかのソーシャルプロダクツを購入している人は 41.0% おり、将来的な商品の購入意向も高かったことから、今後の市場拡大が見込まれる（図 1）。2020 年に実施した調査では、35%だったため、購入率は上がっていると見れる。

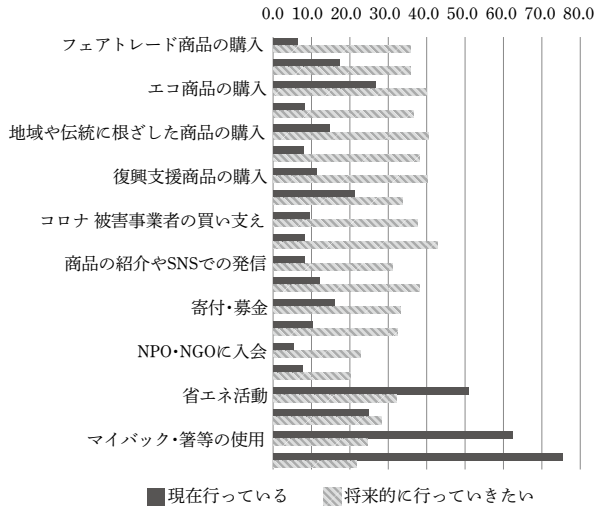

図 1　ソーシャルプロダクツを将来買いたい人と現在行っている人のギャップ（%）
（出典：アンケート調査を元に筆者作成）

先行研究と同様の結果としては、子どもを持つ既婚女性にエシカル消費の実践度が高いことである。そして、無関心層も一定数存在する。本調査から新たに明らかになったことは、若い世代にエシカル消費に関する概念の認知度が高いことである（図 2）。これには、学校教育や SNS の影響が考えられる。

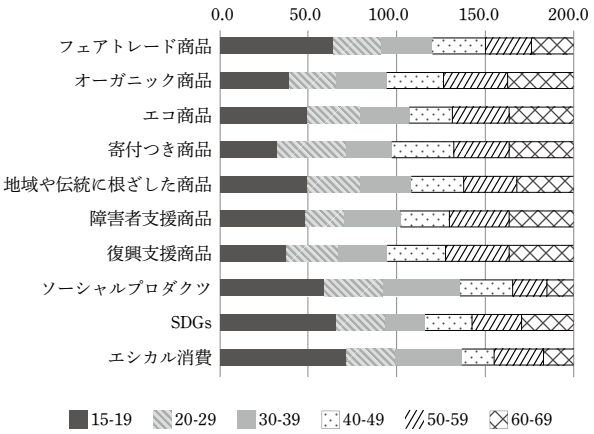

図 2　認知度の年代別比較（%）
（出典：アンケート調査を元に筆者作成）

【考察】

本研究では、社会的課題の解決に繋がる消費行動を取り上げ、将来性や生活者に有効な働きかけを解明するにあたり、文献レビュー及びアンケート調査を行うことで、生活者の特徴や実態について考察した。全体的にエシカル消費の認知度は高まっているものの、行動に移している人は未だ多くなく、態度と行動に乖離が生じていることが浮き彫りになった。社会に浸透していない現状があることから、社会的行動やエシカル消費が問題解決に結びつく可能性はまだ低いと考えられる。

これには、生活者が持つソーシャルプロダクツへの懸念、啓蒙活動が不十分という点が考えられる。アンケート調査から、価格の高さについて多くの生活者が懸念していることがわかった。事業者は、商品の価値が価格に見合っていることを明示する努力が必要である。そして、啓蒙活動が不十分という点では、エシカル消費の実践度が高いイギリスと比較し、消費に関する課題を生活者間で解決するという意識が低いことが示唆された。課題を自分事として捉え、周囲の人と共有できる社会づくりに取り組む必要がある。

女子大学生のきょうだい関係の変化及び認知が自己に与える影響

現代教養学部心理コミュニケーション学科心理学専攻　大﨑和々子　熊木里優　西山杏　松本みな

【目的】

『きょうだい関係認知はどのように変化するのか、またきょうだい関係認知およびその変化や変化の契機はどのように自己へ影響を及ぼすのか』をリサーチクエスチョンとし、女子大学生のきょうだい関係における主観的な経験について、質的研究法による検討を行う。

【方法】

きょうだいのいる女子大学生 13 名（平均年齢 20.85 歳、SD = 0.53) を対象に、オンライン上で半構造化面接による調査を行った。面接調査で得られた録音・録画データから逐語録を作成した。そのうちリサーチクエスチョンに関する内容を抽出し、KJ 法（川喜田, 1967) に基づいて分析を実施した。

【結果と考察】

分析の結果、計 821 個のラベルが抽出され、これらは最終的に《全体的なきょうだい関係認知》、《各ライフステージにおいて特徴的な時期》、《日常的な関わり・交流》、《サポート》、《喧嘩》、《個人的要因》、《環境的要因》、《親》、《自己への影響》の 9 個のカテゴリーグループに分類された。また、45 個の大カテゴリー、122 個の中カテゴリー、36 個の小カテゴリーが抽出された。

Figure 1 は、面接協力者の語りの中で見られた、因果関係を示す表現をもとに作成した、各カテゴリーグループの関係を示す図である。この図から、きょうだい関係認知が構成されるプロセスには大きく 2 つの流れがあることが分かった。1 つ目は《環境的要因》が起点となって《喧嘩》や《日常的な関わり・交流》に大きく影響し、それらが《全体的なきょうだい関係認知》に影響するという流れである。2 つ目は《個人的要因》が中心となって、《喧嘩》や《各ライフステージにおいて特徴的な時期》に影響し、それらが《全体的なきょうだい関係認知》に影響するという流れである。

主にこの 2 つのプロセスによって構成されるきょうだい関係認知に対し、程度の差はあるものの、大半の者は基本的に継続して良好であると認知していた。しかし、思春期・反抗期や受験等に伴う心理面及び行動面の変化を契機として、一時的な対立・葛藤関係への移行が見られた。また、こういった時期の終了は、きょうだい関係認知を再び調和的なものへと変化させていた。よって、女子大学生が経験するきょうだい関係の変化には、具体的な出来事を伴う大きな契機が存在するのではなく、受験等のストレスフルなイベントや、そうした時期における個人の変化が契機となっていると推察される。

きょうだい関係が自己に及ぼす影響については、

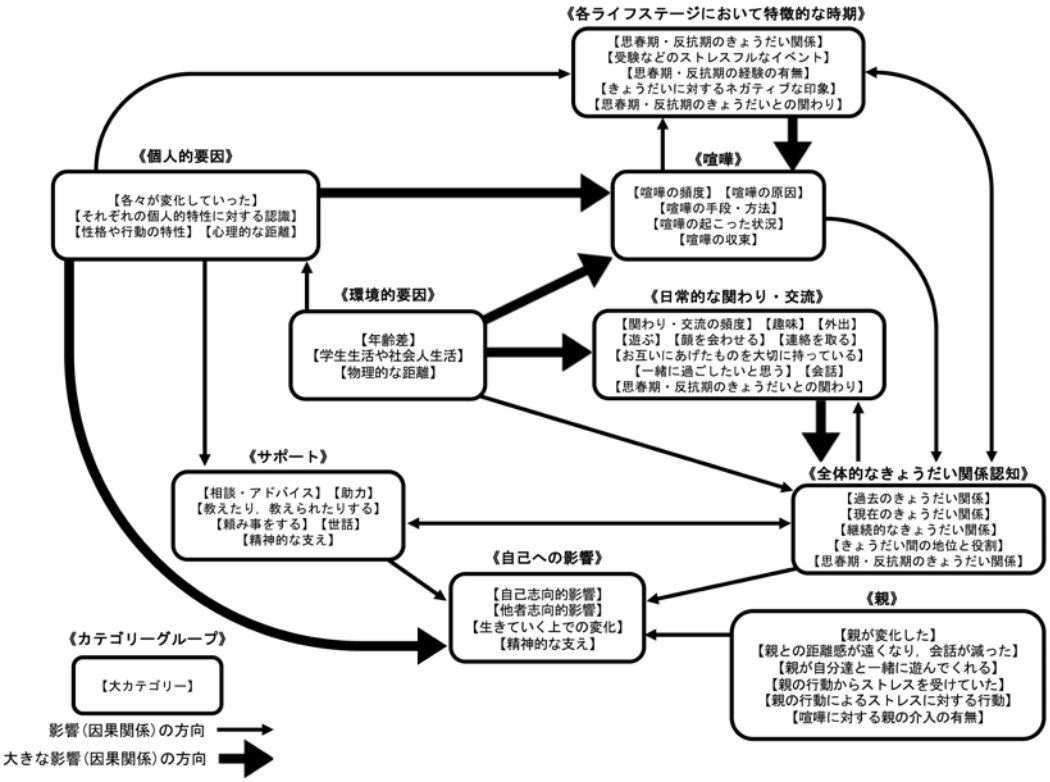

Figure 1. 各カテゴリーグループの関係

〈きょうだいとの関わりから、『自己』に対する気づきがあった〉等による【自己志向的影響】、〈きょうだいを見て対人関係を学んだ〉等による【他者志向的影響】、〈『～でなければならない』という考えが緩和された〉等による【生きていく上での変化】、〈きょうだいとの関係や関わりのおかげで、メンタルヘルスが保たれている〉等による【精神的な支え】の、4つの大カテゴリーが見出された。これらは、きょうだいの性格や行動の特性といった個人的要因からもたらされている場合が多く、きょうだいの存在自体が自己に影響を及ぼすことが分かった。また、きょうだい関係認知も自己へ影響を及ぼす要因の一つであるが、これは、きょうだいとの親密な交流など、その他の様々な要因と相まって影響をもたらしていると考えられる。加えて、親ときょうだいとの関わりや交流も、きょうだい関係が自己へ影響を及ぼす過程で無視できない要因であることが示唆された。

今後の課題や展望としては、面接協力者の生活形態及び家族形態の限定や、家族全体を対象した語りからきょうだい関係を捉えること、社会的背景による影響を考慮することの必要性が推察された。

学生が想像する授業と教員が考える授業の違い
── シラバスで形成される授業イメージのギャップの要因 ──

現代教養学部心理コミュニケーション学科コミュニケーション専攻　**岸璃奈　小池美緒　舟越悠乃**

【研究目的】

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、本学では「授業試行期間」が2020年前期に廃止され、2020年度後期から2022年度後期の現在では、「履修登録取消期間」のみが行われるようになった。それにより、以前よりも学生は受けたい授業であるのかどうかの判断を履修前にすることが難しくなり、学生の想像する授業と教員の考える授業にイメージの違いが生まれる可能性が生じ、学生が履修する授業を決めるためにWeb上で閲覧できるシラバスの重要性が高まった。このような背景の元、「学生の想像する授業イメージ」と「教員の行う授業」について、(1) 学生と教員間の授業イメージにシラバスで違いが生じるか (2) なぜシラバスで授業イメージの違いが生じるのか (3) どのような授業イメージの違いが生じているのかを明らかにすることを目的として研究を行った（図1参照）。

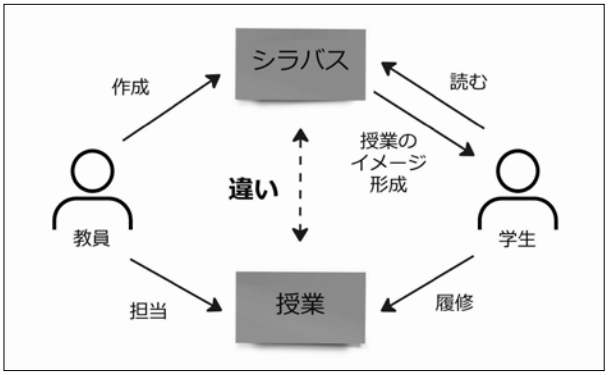

図1　教員－シラバス－学生の関係

【研究概要】

本調査Ⅰでは教員にシラバスを書く際に意識していることや各授業のシラバスの年度毎比較などに関してインタビュー調査を行った。本調査Ⅱでは学生を対象に読解力調査、シラバスの理解度調査、インタビュー調査を行い、シラバスの理解度と学生の読解力の関係性や、学生のシラバスに対する考え、授業の受講前後のイメージ変化などを調査した。本調査Ⅲでは、シラバスで文字装飾がされているか明らかにするため、コミュニケーション専攻のシラバスを30本抽出して調査を行った。

【結果】

学生は、シラバスから授業の内容や授業形態を想像し、授業イメージを形成しているが、シラバスだけでは授業がどのように展開されるのかなどの授業実態が読み取りにくいことがわかった。そのため、シラバスの情報と実際の授業を比較して、実際の授業にポジティブまたはネガティブなイメージ変化が生まれていた。その原因の一つとして、シラバスに書かれる内容の「わかりやすさ」に、学生と教員の間の認識の違いがあると考えられる。理由は、教員は、学生にわかりやすいであろうと考えてシラバスを作成していたにもかかわらず、それを見た学生は、シラバスの内容と実際の授業にネガティブな授業イメージの変化を感じたり、シラバスから授業実態が十分に読み取れていなかったことが本調査で明らかになったからである。また、シラバスは授業を行う教員が作成するため、学生はシラバスの内容を見て教員の印象を形成していた。しかし、その印象が授業を受けた際に変化していた。

以上のことから、教員が考えている授業と学生の想像する授業の間にはシラバスだけでは大きな違いが生じていた。

シラバスの理解度については、学生自身の読解力よりもシラバスを読むことに費やした時間によって左右されていたことがわかった。

また、文字装飾が行われているシラバスは16.6%であり、学生が求めている文字装飾の工夫がほとんど行われていなかった。 さらに、大半の学生が「シラバスの色」に対する不満を挙げ、シラバスの色づかいの変更を求めていることがわかった。つまり、シラバスのデザインに

問題があった。

【考察・まとめ】

シラバスで生じる授業イメージの違いを減らすためには、シラバスから得られる情報の少なさを改善し、教員と学生の「わかりやすいシラバス」における考え方のすり合わせが必要であると考えられる。

「わかりやすいシラバス」のために教員、学生、大学に以下を提案する。

- ●教員：授業の詳細内容をシラバスに記載する
- ●学生：学生にとっての「わかりやすいシラバス」を大学や教員に明示して理解してもらう
- ●大学：適切なデザインで記載できるシラバスの形式に修正する

今回は一部の教員へのインタビューなど調査範囲が限られていたので、今後は、より広い範囲の調査を行いたい。

粘菌アルゴリズムを用いた混雑地域における避難経路の導出手法

現代教養学部数理科学科情報理学専攻　**塩　出　吾衣子**

1．はじめに

地震などの災害発生時において、自宅の損壊や余震の可能性、近隣での火災や土砂災害等の危険が多くある状況下では、安全で迅速な避難をすることが二次災害防止の観点から重要である。現状、災害時の避難誘導は、現在地から最寄りの避難所へと誘導するものが一般的であるが、観光地や都心など人口密度の高い地域では、家や出先など大勢の人々が様々な手段で一斉に避難を開始するため、避難経路上での混雑や避難所の収容数の超過が予想される。このような状況下では、避難者は空きのある避難所へたどり着くまで各所をたらい回しにされる可能性があり、結果として被災者の避難が大幅に遅れてしまうという問題が発生すると考えられる。避難経路を導くための一般的な経路探索のアルゴリズムでは、避難経路上で発生する混雑の影響は考慮されておらず、一度の計算内で単一の始点と終点を結ぶ最短経路を求めることしかできない。また、近年の新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、各自治体で 避難所の収容数を見直された。より一層、混雑や避難 所の収容数を考慮した避難場所・避難経路の決定が重要となっている。

本研究では粘菌アルゴリズムを用いて、避難所の収容数を考慮し、複数の避難開始位置から複数への避難所への経路を同一計算内で導出する手法を提案する。

2．粘菌アルゴリズムについて

粘菌アルゴリズムとは、真性粘菌の一種であるモジホコリ（Physarumpoly-cephalum）は身体に触れている餌の情報を巧みに処理し輸送効率に優れたネットワークを形成することが知られている。この粘菌の生態から着想を得た数理モデルは、管を流れる物質量の方程式（1）と管の太さの変化を表す方程式（2）の２つで表現されており、これらを数値的に解くことで各管における流量の時間変化を得ることができる。スタートからゴールへ一定量の餌を流していくとき、餌の流量が少なければ、太さを維持してもエネルギーの無駄になるため管は細くなり、流量が多ければ、太くなってより多くの栄養を運ぶことで、輸送効率の良いネットワークとなることを実現している。

$$Q_{ij} = \frac{D_{ij}}{L_{ij}}(P_i - P_j) \quad (1)$$

$$\frac{d}{dt}D_{ij} = f(|Q_{ij}|) - D_{ij} \qquad f(|Q_{ij}|) = \frac{|Q|^{\mu}}{1+|Q|^{\mu}} \quad (2)$$

3．実験

吉祥寺駅周辺の道路ネットワークデータに避難開始地点と避難所を設定し、粘菌アルゴリズムを適用させ実験を行った。避難所には、武蔵野市の一時集合場所・避難所に指定されている武蔵野市立の小中学校３地点を設定し、以下の条件で避難経路を導出した。

（1）30 カ所の避難開始地点から、収容数が等しい３カ所の避難所への避難経路（2）（1）と同様の 30 カ所の避難開始地点から収容数が異なる３カ所の避難所への避難経路を導出した。

4．結果

（1）避難開始地点がランダムに定めた 30 カ所、３カ所の避難所の収容数がそれぞれ -0.4、-0.4、-0.4 の場合、図１に示すように、すべての避難開始地点からの避難所と避難経路が導出された。３カ所の避難所へ向かう避難開始地点はそれぞれ 10 カ所となり、収容数を同じ値に設定したことで均等に分かれた。（2）避難開始地点がランダムに定めた 30 カ所、3 カ所の避難所の収容数がそれぞれ −0.6、−0.3、−0.3 の場合、図２に示すように、すべての避難開始地点からの避難所と避難経路が導出された。３カ所の避難所へ向かう避難開始地点はそれぞれ 15 カ所、8 カ所、7 カ所となり、収容数の比とほぼ等しい結果が得られた。（1）（2）より、避難所の収容数を考慮し、複数人の避難経路を同一計算内で導出することが可能であることが示された。

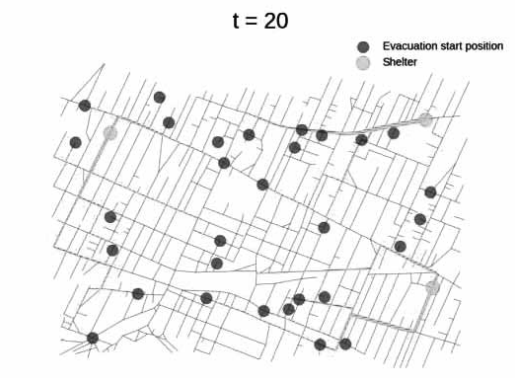

図 1　粘菌アルゴリズムによる避難経路導出（1）

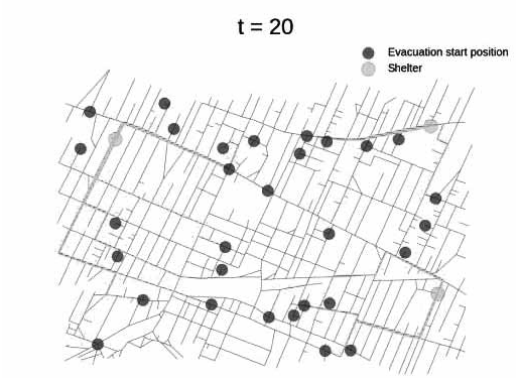

図 2　粘菌アルゴリズムによる避難経路導出（2）

編集・発行　東京女子大学学会